

# ばってん・うーまん 1989 9 月 107 号

〈事務局〉  
〈編集〉

津田尚美  
大城直子

## 「旅博」コスチューム公募ポスターに抗議したことについて (津田尚美)

今、視覚に訴える宣伝に女性の身体があまりにも多く、又、それも胸、腰、脚といった性的想像を喚起させる部分であり、あのポスターもその一つであるということ。あじさいの花の上に頭がないということも「女性に政治はできない」と云った堀江内閣水相の「男の思い上がり」と同じ発想であり、「コンパニオンに必要なのは、

身体だけ」という無意識の発想と思われるのです。

ある者にはかわいいと思われる「ダッコちゃん」も、それを差別だと感じる者がいたらやめるべきだし、客寄せについてどの名称も言葉もかまわないという人がいたとしても、侮蔑された言葉」と受けとる者がいたとしたら使用するべきでないことと同様に、私達女性には、あの無神経に公衆の面前にさらされたポスターに屈辱を感じ、不愉快だったのです。

公的機関が実施している旅博協会の取組の男女の比は 58:4 という男中心で構成さ

性を売りものにした悪趣味 89.8.13 函本

## ポスターは女性蔑視

ばってん・うーまんの会 旅博に撤去申し入れ

長崎「旅」博覧会協会の同  
覧会のコンパニオンのコス

チュームデザインを募集するポスターである」と同協会にために作ったポスターに対して、長崎市の女性たちのグループ「ばってん・うーまんの会」は十二日「女性べっ視の大きなアジサイを中央に配



「女性べっ視」とばってん・うーまんの会が撤去を要求している長崎「旅」博のコスチュームデザイン募集のポスター

れている中で企画されているため、その差別されたものの不満や痛みが理解されず、単に「図案の一つ」と云われては黙って無視できなかったのです。私たちはあのポスターは女性蔑視であり撤去を要求しました。

## 「ガ」 ドキュメント 抗議 全公開\* 『女はそれを ガマンできない』 (大城 直子)

8月のばうてんうーまんは「あじさい女」のポスター（P.1の新聞記事参照）をめぐって展開しました。8月12日、抗議文を掲載した通信の「号外」を手に、私たちは、各部署を訪れました。

### Part 1 ——— “すばらしい”だと

放博協会に対応したのは、林業務。女の肉體や性を扱った広告に対して、最近、各地で女性の側が性差別だとして撤去を求める動きがあるが、それに対してどう考えるかを問うと、「嫌悪のイメージを抱かせるものは、やはり排除すべき」としながら、このポスターは、「すばらしいデザインだと思う」と答えました。私たちは、女性蔑視のポスターであるので撤去を求めました。また、どうしてこんなデザインが採用されたのか、選考過程を詳しく教えてほしいと申し入れると、「調べてみます」との事。さらに、「当初はもっと脚が出ていたのを、後で手直ししたと聞いている」との、アテナイ(?)発言まで飛び出しました。

### Part 2 ——— イヤな 感じ

新聞社にも立ち寄りました。不思議にも、2社とも文脈が同じ。中年の男性記者が、アゴで新米の女性記者を呼びつけ、うむを云わせず、「取材しなさい」と、こうなんです。殊に、N社の女性記者は、他の取材の予定があつたらしく、人夕目に

も気の毒でした。「女だろ?」と云はんばかりの圧力を、部外者の私たちまでが感じてしまったのです。“女の云うことは、女が聞いて然るべき”なのでしょうか。時代は、まさに、男が女の意見に耳を傾ける時に来ていると思われぬのですが……。

### Part 3 ——— “撤去できない?!”

再び、協会を訪れたのは、21日。今回は手応えがありそう。実は、先立って、津田さん宅に、市婦人対策室長上田さんより電話が来り、“本島市長が、ポスターは女性蔑視につながるから、協会を通して撤去すると、コメントした”という内容。

ところが、実際に協会側に会ってみると、協会側は、

- ① 女性蔑視の意図は、全くない。信じてください。
- ② ポスターの図柄について、他からのクレームは全くない。
- ③ 内部でも話し合った。

④ 女性蔑視と受けとめる部分があれば、それは、受けとめ方の違いであり、意見として十分うかがっておき、今後、配慮していきたい。

と、弁明し、厚かましくも「放博」の券を買って、精一杯協力していただきたいと付け足すことも忘れません。ポスターの図柄は「女性蔑視ではない」と言い切り、撤去要請は拒否。これでは、話が違いすぎます。協会側は、「市長から“撤去できないか”と相談があり、“できない”と返答したところ、話しをよく聞いてあげるように”との指示があった」と説明しています。

とすると、「成果」は、実体の件もない「配慮」だけということになります。私たちは、も、と多くの女性と企画チームに賛同することこそ、今後二度と「女性蔑視ポスター」を採用してしまうような事態を起さないための具体策ではないか、と強く迫りましたが、「現段階ではできない相談だ」として、最後まで、平行線をたどりました。

反対意見も飛びだして 〇〇〇

私たちの抗議が新聞で報じられた後、  
その反論とも云うべき意見が新聞紙上  
に表れました。ひとつは、左のコラムで、こ  
れは、私たちを取材した記者が、思った  
ままに、正直に書いています。

「逆差別」であるのは、「反差別」平等性を切り崩す時の、お決まりの文句であることを考え合わせれば、性差別も、あらゆる差別と同様の「根深さ」を思わずにはいられません。それにしても、引き合いに、「ルノール」を持ち出すのは、本筋にゃないね。

「このボスター、どう思われますっ?」の問いに、つい「アジサイが長崎らしくてすてき。お役所にしては、さん新なササインですね」と褒めてしまった。実はこのボスター「女性蔑(べつ)視」が撤去を申し入れている。発行責任者は長崎「旅」博協会・博覧会コンパニオンのコスチュームデザイン募集のボスターということで、女性がアジサイを着ているように、大輪のアジサイから赤いハイヒールの足がスラリと伸びている。「女性の顔も頭もなく、足だけなんて気持ち悪い。人格を無視してセッ

このが彼女たちの言い分。

取材を続けるうちこのポスターを問題視できない私は女として鈍いのかなと思つた。が「このポスターを見る限り性に関する不快感はわかず、デザイン募集の目的に合っている気がする。むしろ、女性の足や肌を見ると何でも性結びつけ、女性蔑視ととるのしかえって女性を意識し過ぎる逆差別なのでは？」と思つた。今にルノワールやマチスの裸婦の絵も女性蔑視と批判されるんじゃないか。とちよつと心配。

(甲)

月日付にあります。私達の抗議についての意向を言明かするということについてお答えしたいと思います。  
 抗議をした理由は二つあります。一つは、広告といえば安易に女の胸、尻、脚を写ってくる風潮  
 の中に、公的機関がこれに従っていること。女差別指紋廃条を批准しているから、女  
 を取り扱う広告には慎重であってほしいと思います。あのポスターは、頭部を花にか  
 え、その下にわざわざ太腿からの脚部をつけてありますが、その発想は「女に政治はできない」  
 つまり、女に頭はいらないと押えられてきた従来の女性観を想起させますし、身体の一  
 部分だけの強調も、とうてい人間賛歌にはつなからないからです。二つめですが、以上の発想  
 がどのようにして出てきたかということです。私達は「ミス旅博」募集の時から抗議を出し  
 ているのですが、旅博協会の構成が58対4の男女比でされており、明らかに男性側の発  
 想でいろいろな計画、運営がなされているとされています。このような公的機関  
 にはとどしどし女発想を取り入れてほしいと思います。（ぼんちん・うーまん会）

長崎新聞の投書欄にも男性から、反対意見が  
登場。それについて、上のような 異なる反論を  
用意しました。

“18-18-18”

新聞社にも立ち寄りました。不思議にも、之社とも又構が同じ。中年の男性記者が、アゴで新米の女性記者を呼びつけ、うむを云わず、「取材しなさい」と、こうなんです。殊に、N社の女性記者は、他の取材の予定があつたらしく、人夕目に



# 『平和運動とフェミニズム』に参加して (小倉千加子 講演会) (倉江さとし)

今年のピースワーク第1日目(8/1)は、大阪成蹊女子短大(心理学)の小倉千加子さんの講演会があり、大勢の人が集まりました。

『フェミニズム(女性解放運動)とエコロジー(自然食・反原発などの住民運動)は異なる。エコロジー運動は、人間の身体を脅かすものそのもの(文化的なもの)を悪とし、自然を善として、それらが二項対立している。一方平和運動は、人間性と自然性の上におくという点でフェミニズムと共通している。一般に、男は攻撃性を有し、女はそれが悪いと見られているが、“女だから自然が好き、平和が好き”というのは、“女の型”にすぎない。野性児の研究によると、人間の本能は食欲だけ(性欲は本能でない)であり、野性児は、自分の食物とられそうな時は強烈に怒る。人間はそもそも攻撃性がある動物であり、平和(人間性)と攻撃性(自然性)の上に置くのは大変なことである。権力はエコロジーを弾圧しないが、権力を脅かす平和運動は弾圧してくる。したがってリアリストになって 戦略を考えていくことが大切。

人間性は 文化的に作られたものであるという点では、女らしさ男らしさというものは 生まれながらに備わっているものではなくて、極めて社会化された「女の型」「男の型」である。社会の型による抑圧を解放して抑圧の垣根をとっばらってやることが大切。』 以上のような話を 女性差別のいろいろな例、離婚した子持ち女性や、パートタイマーの主婦の「女性の貧困化」現象などを、心理学の実験もまじえての興味深い講演でした。

また小倉さんは別の講演で「オバさんにも少女期があり “夢”がある、たはず。それをなし崩しにしてきたのは、男達、この社会の制度のせいだとは、きりかせるべきで、“私の中に未だ天才が眠っているという自覚を持つべきだ。自分の天才に気づくのに 年齢制限はない。」と、話されています。私たち、ひとりひとりの中に眠っている天才を呼びさましていきたいですね。



さとし